

# 現代批評の批判的一考察

——ポストコロニアリズム、フェミニズム

ポストモダン、ディコンストラクション——

綾 目 広 治

一

一九七〇年代後半から今日に至るまで、欧米を発信地とする様々な批評理論が日本にも紹介された。文学研究はそれらの批評理論を急いで吸収して、というよりも十分に咀嚼しないまま飲み込んで次々と研究に応用している。十分咀嚼しないままというのは、批評理論を理論として理解しないということではない。いわば批評の「理屈」は理解しているのだが、それらの批評理論が生まれ出た歴史的背景やその思想的意味を不問に付したまま、あるいはそれらの問題に対しては驚くほど鈍感な状態のまま、批評理論の摂取とその応用に暇がないかのような有様のことである。田中実氏が述べているように、たとえば、「〔本文〕の一義<sup>11</sup> 神を否定し、文明という制度を解体、再生させるために登場した」ロラン・バルトのテクスト概念も、日本に輸入さ

れるとその概念の持つ強烈な批評性が剝落して、「ああも読めるが、こうも読める」という、「ナンデモアリ」の単なる恣意的な読みの実践になってしまっている。<sup>1)</sup>

たしかに田中氏の言うとおりである。日本の研究や批評にはそのような問題がある。さらにそれとともに、いわば本家の欧米の批評理論の方にもいくつかの問題があると思われる。欧米の批評理論の中にある問題を（時として無自覚に）引き継いでいるのが、日本の研究や批評であるといった側面もある。本稿では、それらのことについて素描しながら、現代批評が抱える問題について論じてみたい。

さきほど述べた批評性の剝落という問題は、政治性についての自覚の欠落という問題にもつながってくるように思われる。たとえば、日本でも注目されているポストコロニアル批評である。ポストコロニアル批評の代表的著述の一つであるピーター・ヒュームの『征服の修辭学——ヨーロッパ

パとカリブ海先住民、1492-1797年』の訳者は「あとがき」で、「われわれの文学批評に関する見方を決定的に変えてしまった『階級、人種、性差、セクシュアリティ』という枠組が、じつはヨーロッパ近代というとつもない搾取の歴史的現実と、切っても切り離せない関係にあることを、われわれは植民地主義と帝国主義を支えてきた言説の分析を通じて知りつつある」と述べている。<sup>2)</sup>なるほどそのとおりなのであるが、そのように言うことで終わってしまうならば、ポストコロニアル批評は過去の「植民地主義と帝国主義」の問題を扱っているというふうな受けとめられてしまうであろう。実際、ポストコロニアル批評を批評の一技法として取り入れられている日本の外国文学研究者にはそのような傾向も見受けられる。つまり、現代の政治的現実という問題と文学との関係にはあまり目を向けないのである。目を向ける場合でも、過去（の文学）の読み直しは現代（の文学）の捉え直しに通じる、というふうなあくまで間接的なものにすぎないようだ。また、人種やエスニシティの問題が現代の問題として論じられるときでも、それは人道上の人権問題としてのみ考えられているのではない。しかし、人種やエスニシティの問題は、過去の「植民地主義と帝国主義」の問題であるとともに直接に現代の問題であり、人道上の人権問題の枠には収まり切らない政治経済体制の問題と関わっているのである。

たとえば、世界システム論のイマニエル・ウォーラーsteinは、「人種差別と低開発は（略）史的システムとしての資本主義世界経済の構成要素となっている。それらによって史的資本主義の存在理由である、不断の資本蓄積が可能となっている。」<sup>3)</sup>と述べている。ウォーラーsteinによれば、資本主義は一国資本主義の問題として考えては、その本質を捉えそこなう。資本主義は一六世紀から徐々に世界経済システムとして作動してきたのであり、今日にいたるまで資本主義世界経済は、中心地域と半周辺地域と周辺地域の三つのブロックに分けられ、中心地域（現代では米、西欧、日本）は常に半周辺（現代ではロシア、東欧など）や周辺（それら以外のところ）の地域に対して不等価交換を強いることによつて自国を繁栄させてきた。もちろん半周辺の地域の中からキャッチアップして中心の仲間入りをするところもあるが、そうすると中心から半周辺に脱落するところ必ず出てくる。周辺と半周辺の関係も同じである。つまり、それぞれの地域間での一部の国の上昇、下降はあるが、中心-半周辺-周辺という階層構造自体には変化がないのである。現在までそうであつて、資本主義は世界経済システムとしてしか作動しえない以上（というものは、資本主義はマルクスが想定したような自国労働者の剰余労働によつて富を蓄積する面よりも、半周辺や周辺などの低開発地域に対する不等価交換=収奪を不可欠としているから）、そ

の階層構造を維持しようとする、とウォーラーステインは述べている。

そこで注意されるのは、エスニシティの問題が浮上してきたのは、世界経済システムとしての資本主義が誕生し始める一六世紀以降だということである。そうだとするとポストコロニアル批評が取り上げる人種や民族の問題は、資本主義世界経済の問題と深くつながっていることになってくる。もちろん、現在では一国内で多数の人種や民族が生活している地域も少なくはなく、問題は複雑な歴史的文化的な様相を呈しているのであるが、多くの場合、そこでのエスニシティの問題は人種間の問題としてのみ、あるいは民族間の問題としてのみ捉えられている。そしてそれらは、前述したように結局は人道的な人権問題の枠組で論議されてしまうのである。しかし、ウォーラーステインが「低い階級の地位と低いエスニックな地位の相関関係は存続する」と述べているように（たとえば日本においてもいわゆる3Kの職種が外国人労働者向けの仕事になっていることから、そのことは端的に了解できよう）、それらの問題は現代の政治経済の問題と直接に絡まっているのである。したがって、ポストコロニアル批評が扱わなければならないのは、人権意識が低かった過去の非人道主義の問題だけではないのである。とくに日本のポストコロニアル批評の論者に問われているのは、現代社会に対してどういう政治的スタンスを

とるのかということであると思われる。少なくともそのことの自覚が必要であろう。

## 二一

日本のフェミニズム批評についても同様のことが言えるのではないか。と言つても、フェミニズム批評が政治的な事柄に鈍感であるというのではない。むしろ、その逆であつて、フェミニズム批評の原理の一つに「個人性は政治性にほかならぬ」(傍点・原文)とあるように、フェミニズム批評は政治に敏感なのである。さらには、「個人性が政治性であるだけでなく、審美性も政治性、文学性も政治性、修辭性も政治性であると言えるでしょう。」<sup>5)</sup>というように徹底して政治的であるとさえ言える。ただ、その政治概念は古典的な狭義の概念ではない。たとえばラディカルフェミニズムのように、性支配を歴史貫通的なものとして捉える立場は、性支配は独自の支配構造であり、階級構造には還元できないと考えているから、政治が問題になる場合のその政治とは、男女間の権力関係のことであることが多い。従来は男女間の単に個人的な人間関係として考えられていたことを、政治的な問題として、すなわち権力関係の問題として捉えようとするのである。これは、従来のマルクス主義フェミニズムに見られたように、何もかも階級構造に

還元してしまい、たとえば個々の人間(男女)関係にむしろ露骨に現われていた性差別の問題を等閑に付すようなあり方に対する反省でもあったと言えよう。その意味でこれは、けつして手放してはならない大切な観点である。

しかし、いわばミクロの権力の問題に執するあまり、マクロの政治権力との関係という問題が隅に追いやられてしまっているのではないか。権力をミクロな次元で見ているとする考え方には、ミツシエル・フーコーのいわばミクロ政治学、その微視的権力概念の影響が窺われるが、フーコーの微視的権力概念が問題喚起的な示唆性に富む反面、ある危うさを孕んでいたように、日本のフェミニズム批評にもある種の危うさがあるように思われる。フーコーによれば、権力を強圧的に人々を抑えつける政治機構として捉えると、権力の問題はうまく解けない。権力とは、人々が自己規律の装置を内在させ、それによって自らも知らないうちに自己を制御してしまうような匿名の装置のことである。しかし、制御すると言っても、それは行動を禁じるネガティブな働きではなく、むしろ、逆に行動を促すポジティブな働きをする。もちろん、ある一定の方向にはではない。

このようなフーコーの権力概念は、人々の中に自己規律の装置が内在されているという点においてどこかフロイトの超自我の概念に似ている。また人々にポジティブに働き

かける点ではマックス・ウェーバーが論じたプロテスタンティズムの倫理にも似ているのだが、超自我や倫理をも権力と捉えるならば、権力概念の外延が拡がりすぎてしまうように、フーコーの「遍在する権力」という概念も権力問題を拡散させてしまい、焦点をぼやかしてしまっているのではないか。J・G・メルキオールは、「遍在する権力」というのを認めたからといって、「権力研究に際して意図や利害的関心を排除すべきだということにはならないのである。」と述べ、「社会権力の分析の健全な前途が、構造主義の主観・主体恐怖症の悪しき側面につながってしまったのだ。」とフーコーの権力概念を批判している。また、ピエール・ブルデューは、フーコーについて、「反抗の哲学です。その意味でフーコーは青少年向きの哲学者なんです」と述べ、その思想は「青少年の反家族的な反逆とエステティックな反逆の入り交じったものです」と語っている。たしかにそのミクロ政治学は、超自我を権力として指弾するような趣きがあるから、ちょうど父に抗う子どもの反抗の政治学のようなものに見えてくる。そして、そこにおいては「社会学の分析の健全な前途」が閉ざされることになるのである。

もちろん、フーコーは実際の政治権力に対して緊張した意識を持っていたし、また、その権力概念は従来の権力観に反省を迫る有益な視点を提出していると言えるが、しか

し、今述べたような危うさがあると思われる。その危うい面を引き継いでいるところが、とくに日本のフェミニズム批評にはあるのではないか（フーコーの権力概念との関係をどれだけ自覚しているかはともかくとして）。つまり、マクロの権力をどう考えるかという問題は等閑に付したまま、ミクロの権力の政治性を問題にしているのではなからうか。そういう傾向がありはしないだろうか。それは、一見ラディカルなように見えて、現在の社会経済体制に対してどのような政治的スタンスを取るのかという問題には背を向けるわけだから、実は安全なフェミニズム批評なのである。安全なというのは、社会経済体制にとって危険ではないということでもあるが、それとともにフェミニズム批評を語る当人にとっても、社会経済体制に対する政治的スタンスのその旗幟をあきらかにしなくてもいいから安全なのである。

しかし、日本のフェミニズム批評は、現代の社会経済体制やマクロの権力の問題に対してもっと意識的であるべきではないだろうか。たしかに性支配の構造は階級構造に還元できない。また、現代の階級構造も古典的な階級概念によつては捉えられないだろう。さらには、はたして階級という概念自体が現代社会では成り立つのかという問題もある。だが、確実に言えることは、現代の性差別の問題は現代の社会経済体制の問題とリンクしているということである。そのことは、多くの場合女性によつて担われ、しかも

社会経済体制に対して労働力の再生産という重要な貢献をしている、I・イリイチが言うところのシャドウ・ワーク（この場合は家事労働）が、経済的評価をほとんど受けていないこと一つとってもあきらかである。前述したポストコロニアリズムとの関わりで言えば、女性は労働市場ではエスニック・グループと同程度の扱いをうけることが少なくない。彼女たちは労働市場におけるエスニック・グループなのだ。もしも、このような現代の社会経済体制やマクロの権力の問題から目をそらしてフェミニズム批評を語るのならば、それは日本のポストコロニアル批評も陥りがちな傾向にある、まさに安全な人道上の人権問題批評になってしまうであらう。

### 三

さて、現代批評の潮流の中には、ポストコロニアル批評やフェミニズム批評のほかにはポストモダン批評やポスト構造主義の流れ、さらにはカルチュラル・スタディーズなどがある。これらの間には相互影響があつて、たとえばポストモダン・フェミニズムを掲げる立場もあつたりする。次にポストモダンリズムとポスト構造主義（とくにディコンストラクション）について見ていきたい。

J・F・リオタールの『ポスト・モダンの条件』<sup>(9)</sup>によれ

ば、ポストモダンとは《大きな物語》に対する不信感のことである。《大きな物語》とは、《精神》の弁証法、富の発展、主体の解放などの物語のことで、これらの《大きな物語》を信じて人々が生きたのが近代（モダン）という時代であった。しかし、近代（モダン）があきらかにしたのは、その逆の歴史であった。事実としてあったのは、貧富の格差の増大であり、主体の抑圧であり、ヘーゲルが述べたような《絶対精神》の域に人々が高まることはなかったのである。そうである以上、《大きな物語》は失効したと言える。ポストモダンの時代とは、ポスト《大きな物語》の時代のことである。

たしかにそうだと言えるのだが、注意したいのは、J II F・リオタールが《大きな物語》に対する批判を知に對する批判に結びつけていることだ。この場合の知とは、科学的知や物語的知を含むもので、つまりはロゴスや理性のことである。解放の物語であったはずの《大きな物語》が、結果としては抑圧の物語として機能したことは、スターリン主義の歴史を見るだけでもあきらかだが、J II F・リオタールは、理性が《大きな物語》を支え、そのことがたとえば全体主義を生む要因となったかのように語っている。すなわち、「理性と権力は、完全に一体となっている。(略)理性が大好きなこの世紀末のソフトな全体主義の手中に横たわる理性を信じる必要はもはやない」と。

しかし、このような理性批判はあまりに短絡的であると思われる。なるほど理性は非理性を排除するという《暴力》や、精神／肉体、本質／現象といった位階秩序に物事を従わせようとする《暴力》を持つていて、その点において理性にはどこか専制政治や全体主義に通じる側面がある。だが、理性がそれ自体として全体主義を生んだのではない。全体主義の問題は、ハンナ・アーレントが『全体主義の起源』で詳細に論じているように、植民地主義や民族主義との関わりや、大衆社会状況との関係といった複雑な要因から考察されなければならないだろう。また、ファシズムの政治権力を見てもわかるように、全体主義の権力は（全体主義に限らず一般的に権力は）たしかに理性と結びつくところもあるが、非理性とはもつと親和的に結びつくのである。さらに言うなら、理性には形式的、道具的、実践的、批判的、客観的等々の様々な側面があるのであり、それらの中の一部の側面（アドルノとホルクハイマーならば、それは道具的側面だ、と言うであろう）が全体主義と結びついたのであって、理性が丸ごと全体主義に協力したのではないのである。

このようにJ II F・リオタールに端的に現われているポストモダンの理性批判は偏頗なのであるが、しかし、理性の中にある抑圧的契機を浮かび上がらせ、無前提に理性善であるとする啓蒙主義的な理性《信仰》に反省を迫った

ことは、大いに評価されていいだろう。またそのことと関連して、この理性批判が、定型化した発想や固定しがちな思考の枠組を解体させようとするものであった点においても、私たちに有益な示唆を与えてくれたと言えよう。それは、理性によって秩序づけられた枠組が、いわば生の経験を一面的にしか捉えられないことに対する批判でもあった。だから、それらの批判は十分に評価されていいのだが、しかしそれにしても、それらの枠組を解体した後で、私たちはどこへ行けばいいのだろうか。J・F・リオタールならば、どこか目的地に行くのではなく、「漂流」するのだと言うであろうが、この問題について語るポストモダンの思考にも疑問を持たざるをえないのである。

たとえば、ポストモダンの思考を展開していると言え、蓮實重彦氏の『物語批判序説』は、次のように述べている。<sup>①</sup>人は自らの意志で語るというより、「説話論的な磁場」の中で「人は語るのではなく、語らされてしまう」。「説話論的な磁場」とは、誰が何のために語っているのかが判然としない領域なのだが、この「説話論的な磁場」の中から物語が生まれてくるのだ。「説話論的な磁場」はある特定の集団や人間が操作しているのではないという意味で、「説話論的な磁場」は、どこか自然の環境を思わせもする。だが、これは普遍的な空間ではなく、きわめて歴史的な時間空間なのである。人はそのことを意識することなく、し

かも自らの意志で語っていると思っている。実は、「説話論的な磁場」によって「紋切型」の物語を「語らされしまう」にすぎないのに。しかし、「具体的な何もものかと遭遇するとき、人は、説話論的な磁場を思わず見失うほかないだろう」。そしてこのとき、人は何ごとかを知るのであると蓮實氏は言う。

何ものかを知るとき、人はそのつど物語を喪失する。

これは、誰もが体験的に知っている失語体験である。

言葉が欠けてしまうのではなく、あたりにいつせいにたち騒ぐ言葉が物語的な秩序におさまりがつかなくなくなる過剰な失語体験。(略)この過剰なるものの理不尽な隆起現象だけが生を豊かなものにし、これを変容せしめる力をもつ。

「説話論的な磁場」という考え方にはフーコー的なエピソード——概念やマルクスのなイデオロギー概念が取り入れられていると思われるが、ここには前述した、定型化した発想や固定した思考の枠組を解体させることで、「生を豊かなものにし」ようとするポストモダンの発想があると言えよう。と言っても、蓮實氏の論述は単純ではない。蓮實氏の物語批判は、「説話論的な磁場」なり「物語的な秩序」なりが一挙に解体できるかのような、まさにもう一つの物語を語っているのではないか、という批判をあらかじめ封じこめる論述も忘れてはいない。蓮實氏は、ロラン・

バルトに託しながら、次のように述べている。

「コードは破壊できず、ただその〈裏をかく〉ことしかできない」といった言葉をことあるごとにくり返しながら、彼はその錯覚の体系ときわめて浅く戯れてみせるだけなのだ。この浅さこそ、バルトの美德である。

言うまでもなく、「コード」とは、「説話論的な磁場」や「物語的な秩序」と類縁の「錯覚の体系」のことである。

「コード」は破壊できるものではないから、これと「浅く、戯れてみせるだけなのだ」(傍点・引用者)というところに、「表層批評宣言」(同)の著者らしきがあるとともに、一種のシニシズムも感じられ、蓮實理論の一筋縄では捉えられない特質があるのだが、しかしながら、「過剰なるもの理不尽な隆起現象だけが生を豊かなものにし」といった論述から窺われるのは、やはり基本的にはポストモダンのな発想である。むろん、こういう発想のあり方は、文学を概念的な要約に還元することを忌避するロマン主義美学やニュークリティシズムにすでにその祖型があると言える。

しかし、たとえばニュークリティシズムが、文学の概念的な要約への還元を批判したとしても、最終的には文学(詩)の微妙な複雑さに、しかも有機的に統合された複雑性について安住して事足りりとするのに対して、ポストモダン批評は「説話論的な磁場」や「物語的な秩序」に徹底して批判的であり続けようとする。それらに「浅く戯れてみせる」

にせよ、深くこだわるにせよ、否定的姿勢を取り続けることに自らの存在理由を見出だしているかのようだ。

だが、このような批評のあり方には問題がありはしないだろうか。「説話論的な磁場」や「物語的な秩序」には、たしかに人々の思考に類型化を強いる負の面があり、さらにはそれらの「磁場」や「秩序」はしばしば硬化しがちでもある。しかし、その反面、混沌として掴みどころのない現実を、思考の対象になりうるように整序する正の面があるのである。もしも、この正の面をも「磁場」や「秩序」だから悪しきものであると批判するならば、私たちは物事を考えること自体を一切やめなければならなくなるだろう。

正の面についても十分承知しているとポストモダン批評は言うかもしれないが、それならそのことに論及しなければならぬ。それをせずに、負の面のみを語るのならば、やはり偏頗であるという批判はまぬがれないだろう。そして結局は、「磁場」や「秩序」をはみ出る「過剰なるもの」の理不尽な隆起現象に直面することが「生を豊かなものに」するのだ、といったような単に非合理主義的な〈救済〉のイメージが喚起されてくるのであるから、こうなるとこれは硬化した「磁場」や「秩序」と同じくらいに問題である。たしかに「あたりにいつせいにたち騒ぐ言葉が物語的な秩序におさまりがつかなくなる過剰な失語体験」は、「生を豊かなものに」する。と言うよりもそのことの機縁とな



りうるのであって、「過剰な失語体験」が「説話論的な磁場」や「物語的な秩序」にあらたに繰り込まれることよつて「磁場」や「秩序」がいわば拡大再編成し直されてこそ、真に「生を豊かなものに」することができるのだ。そうでなければ、たとえ「過剰な失語体験」を繰り返しても、それは意外に類型化した慢性的な陶酔体験に終つてしまうのである。そうなると、それは硬化した「磁場」や「秩序」と変らなくなるであらう。

#### 四

ポストモダン批評に見られるような、規範的秩序に対する抵抗を存在理由とするようなあり方を、マーティン・ジェイは「否定的自律性」と呼んでいるが、<sup>12)</sup>「否定的自律性」は、マーティン・ジェイが批判的に論じている、ディコンストラクション派の代表的存在の一人であるポール・ド・マンに端的に見ることができる。たとえばポール・ド・マンは、「文学理論はイデオロギーの作用のメカニズムを暴露することによつて、根深いイデオロギーを転覆させ、<sup>13)</sup> まうのである。それは、美学を主要部分として含む強力な哲学的伝統に反対する。それは文学作品の確立された規範を転覆させ、文学的言説と非文学的言説との間の境界線を曖昧にする。」<sup>14)</sup>（傍点・引用者）と述べている。規範的秩

序を「暴露」して「反対」し、それを「転覆」させて秩序の枠組を「曖昧」にするというのである。ディコンストラクション派は「過剰なるもの」などには思い入れを持たないから、したがつてそれだけにシニカルとも言えるから、「否定的自律性」の傾向を一層強めるのである。

けつしてシニカルではなく、また、きわめて示唆的な論述に富む柄谷行人氏の『探究Ⅰ・Ⅱ』にも「否定的自律性」の傾向が顕著である。それは、『探究Ⅰ・Ⅱ』の頃がもつともポール・ド・マンの影響が強かつたためだとも思われるが、『探究Ⅰ・Ⅱ』で柄谷氏が言おうとしていることは、内部（言語ゲームを共有する共同体のこと、さきの「物語的な秩序」とその内包がかなり重なる概念である）から外部へ出ようとする「態度」を持ち続けなければならないということである。柄谷氏によれば、文字どおりに私たちは外部に出ることはできない。だから大切なことは外部的であろうとすることだ。その意味での外部存在だ。柄谷氏は他の箇所ではこう説明している。

それは（外部存在―引用者）は共同体を超えるわけではない。そうではなく、その自明性につねに違和を持ち、それをたえずディコンストラクトしようとするところです。

やはり、これは「否定的自律性」の姿勢を取り続けようとすることである。『探究Ⅰ』のあとがきで、「それ〔探

究』引用者)は同じことの『反復』であるかも知れない。だが、(略)書くことが生きることであるということ、私ははじめて実感している。」<sup>15)</sup>と柄谷氏は述べているが、こうなると「否定的自律性」自体が一つの倫理にまで成りかかっていると見えよう。あるいはそこに審美的思い入れを込めるようになってくると美学にも成るのだが。しかしそのことよりも、ここで問題にしなければならぬのは、「否定的自律性」の姿勢がやがて自己目的化してしまい、シニズムに陥るのではないかということである。柄谷氏がそうなると言うのではない(なぜなら柄谷氏は「移動」するであろうから)。一般論として、「否定的自律性」の姿勢を取り続けることはシニズムに結びつきがちだということである。

その問題に関して興味深いのは、ペーター・スローターダイクの浩瀚な著書『シニカル理性批判』<sup>16)</sup>である。この書はキニシズム(犬儒主義)がやがてシニシズムへと変貌していく様を豊富な事例をあげながら論じている。スローターダイクによれば、キニシズムはその祖ディオゲネスに見られるように「毅然たる反骨の精神」であり、とくに認識におけるキニシズムは「知を相対化し皮肉る」ものであり、「それは、理論やイデオロギーが自分に仕掛けてきたものに対する、生きんとする意志の側からの回答なのだ。精神的な生存術にして知的なレジスタンス、風刺にして『批判』

である」。たとえば古代キニク派は、秩序に対して勝手放題を、掟(ノモス)に対して自然(ピュシス)を、コスモスに対してカオスを、大きな全体に対しては極小の断片を語った。そこには潑刺たる批判精神があったのだが、ローマ時代になりキニシズムがラテン語によってシニシズムと言われる頃になると、健全な反骨精神を失って冷笑的で歪んだイロニカルな優越精神をあらわすものとなる。いわば清貧の精神でもあったキニシズムは自己保身的なシニズムに変貌する。スローターダイクは、「フモールに満ちた賤民の文化批判に宿っていたキニカルな衝動が、支配する側の上層の人間たちのシニカルな風刺へと急転してゆく」と述べている。

さらにスローターダイクは、シニシズムの精神風土がナチズムの温床になったという問題にまで論及しているのだが、その問題はさておくとしても、『シニカル理性批判』の論述は、あたかもポストモダン批評やディコンストラクション派の批評の功罪について語っているかのようである。当初は《大きな物語》やプラトニズム的な形而上学の大理論を「相対化し皮肉る」「毅然たる反骨の精神」であったものが、「否定的自律性」の中に安住して文字どおりに「浅く戯れてみせる」だけのものになってしまっているのではないだろうか。それは、何事にも深くコミットしようとはしないシニカルな精神であり、客観的には安全な態度

である。

本稿の冒頭で、田中実氏が批判している、「ああも読めるが、こうも読める」という「ナンデモアリ」の恣意的な読みについて触れたが、それもコミットすることを避けようとするシニズムの現われかもしれない。また、シニズムは感じられないものの、コミットしなければならぬはずの問題を避けて（おそらく無自覚に）、新しい批評理論を批評の技法として消化しがちである日本のフェミニズム批評やポストコロナリアル批評も、「ああも読めるが、こうも読める」（フェミニズムでも読めるが、ポストコロナリアルでも読める）というところがありはしないか。そうならば、それは、危機 (crisis) の意識である批評 (criticism) とは程遠い精神である。

### 注

- (1) 田中実『小説の力 新しい作品論のために』（大修館書店、一九九六・二）。田中氏にはほかに、〈恣意的な読み〉の問題をさらに展開した著書『読みのアナキーを超えて』のちと文学』（右文書院、一九九七・八）がある。
- (2) ピーター・ヒューム『征服の修辭学——ヨーロッパとカリブ海先住民、1492—1797』（岩尾龍太郎／正木恒夫／本橋哲也訳、法政大学出版局、一九九五・三）。「あとがき」は訳者一同となっている。
- (3) イマニユエル・ウォーラーSTEIN『脱II社会科学

- 一九世紀パラダイムの限界』（本多健吉、高橋章監訳、藤原書店、一九九三・九）。本稿でのウォーラーSTEINからの引用はこの著作に拠る。しかし、本稿で述べているウォーラーSTEINの学説については、『近代世界システム』I、II（川北稔訳、岩波書店、一九八一・七、一九八一・一〇）、『近代世界システム1600—1750重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集』（川北稔訳、名古屋大学出版会、一九九三・六）、『資本主義世界経済I——中核と周辺の不平等』（藤瀬浩司他訳、名古屋大学出版会、一九八七・四）、『資本主義世界経済II——階級・エスニシティの不平等、国際政治』（日南田静真監訳、名古屋大学出版会、一九八七・一〇）などのウォーラーSTEINの他の著作も参照した。
- (4) サンドラ・M・ギルバード『フェミニズム批評家はなにを望むか——火山からの便り』（エレイン・シヨウウォーター編『新フェミニズム批評』〈青山誠子訳、岩波書店、一九九〇・一〉所収）。
- (5) (4)を参照。
- (6) J・G・メルキオール『フーコー——全体像と批判——』（財津理訳、河出書房新社、一九九五・九）。
- (7) ピエール・ブルデュー『ピエール・ブルデュー超領域の人間学』（加藤晴久編訳、藤原書店、一九九〇・一一）。
- (8) C・V・ヴェールホフ他『世界システムと女性』（吉田晴美・善本裕子訳、藤原書店、一九九五・二）は、ウォーラーSTEINの理論とフェミニズムとを関わらせながら、エスニシティの問題も論じている。

(9) J・F・リオタール『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』（小林康夫訳、書肆風の薔薇、一九八六・五）。

(10) J・F・リオタール『漂流の思想——マルクスとフロイトからの漂流——』（今村仁司他訳、国文社、一九八七・九）。

(11) 蓮實重彦『物語批判序説』（中央公論社、一九八五・二）。本稿での蓮實重彦氏の文章からの引用はこの書に拠る。

(12) マーティン・ジェイは『力の場 思想史と文化批判のあいだ』（今井道夫他訳、法政大学出版局、一九九六・一二）の中で、ポスト構造主義の「倫理は道徳的命令の絶対的な体系、つまり理論的に正当化されうる規範的な秩序に対する抵抗として理解されている、ということである。これをわれわれは、ポスト構造主義思想における『否定的自律』のモチーフと呼んでいいだろう。」と述べている。

(13) ポール・ド・マン『理論への抵抗』（大河内昌・富山太佳夫訳、国文社、一九九二・五）。

(14) 柄谷行人『言葉と悲劇』（第三文明社、一九八九・五）。

(15) 柄谷行人『探究Ⅰ』（講談社、一九八六・一二）。

(16) ペーター・スローターダイク『シニカル理性批判』（高田珠樹訳、ミネルヴァ書房、一九九六・一二）。

〔付記〕 本稿は、「千年紀文学」第九号（一九九七・七）、第一

〇号（同九）、第一一号（同一）に掲載した拙論にもとづき、それらの論を敷衍したものである。

（ノートルダム清心女子大学）